えてきて豊助は立ちどまりました。目の前で働く人夫のものとはちがった物音です。

「おい、向こう側ののみの音が聞こえるぞ。」

一瞬、人夫たちの仕事がとまりました。カーン、カーンと聞こえる音は、たしかに目の前の岩壁の向こう側から聞こえます。

「もうすぐだ、がんばれ。」

豊助の声と共に、人夫たちはいっせいに岩壁にとびつきました。豊助は、興奮のあまり、足もとがふるえるようでした。掘りぬかれたわきの岩壁に片手をついて、からだをささえるようにしてようやく立っていました。土の冷たさが、片手を通してからだ全体を伝わり、ようやくふるえがとまったと思ったとき、人夫の一人のふるったのみが、空を切るように岩壁の中にすいこまれました。

「やったあ。」